



スターチス 栽培スケジュール

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
		収穫・出荷				植付準備		定植			収穫・出荷

いつまでも色褪せない「変わらぬ心」

スターチス

わかやまの



育むのは人と風土

和歌山産品に関することなら…

和歌山県産品カタログ

<https://food-distr.pref.wakayama.jp/kensanpin/dbtop.html>

〈和歌山県アンテナショップ〉

わかやま紀州館 <http://www.kishukan.com/>

東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館地下1階

TEL. 03 (6269) 9434 FAX. 03 (6269) 9433

営業時間 10:00~19:00 (日曜・祝日は10:00~18:00)

〈インターネットショッピングモール〉

ふるさと和歌山わいわい市場 (ヤフーショッピング)

<https://store.shopping.yahoo.co.jp/waiwai071700>

和歌山の花きに関するお問い合わせは…

和歌山県農林水産部果樹園芸課

〒640-8585 和歌山市小松原通1-1

TEL. 073 (441) 2900 FAX. 073 (441) 2909

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/index.html>

温暖な気候と 土壌が育くむ 全国屈指の花産地

スラリとまっすぐ伸びる茎の先端に穂状の花序(かじよ)をつけるスターチス。花もちの良さから切り花として重宝されるだけでなく、ドライにすれば年中楽しむことができる。和歌山県御坊市を中心とした県中部はこのスターチスに加え、宿根カスミンソウやガーベラなどを作る全国有数の花の生産地。中でもスターチスは出荷量日本一を誇る。

露地栽培では春から初夏にかけて開花するが、ハウス栽培で育てる和歌山のスターチスは秋から春にかけて収穫期を迎える。そこには、苗を一定期間低温にさらし、開花誘導する「春化処

理」と呼ばれる技術が用いられており、本県の温暖な気候を十分に生かしたスターチスの一大産地が形成されている。また、以前は種から育てていたが、最近ではメリクロン苗(植物の分裂組織を無菌的に培養し、増殖した苗)が主体となり、品質も安定。とはいえ、日々病気の発生がないうような気を配りながら、丹精込めて育てられていく。海を背景に花を栽培するハウスがずらりと建ち並ぶ道は別名「名田フラワーロード線」と呼ばれる。



花冠
ガク
花冠

スターチスはガクが花だと思われがち。上の写真だと白い部分が本来の花冠。花が結んでも紫のガクは鮮やかなまま。

紫、青、ピンク、黄、白、オレンジなど色のバリエーションに富むスターチスは細かな色のニュアンスで分かれる品種を含めると100種以上が登録されている。だが「花の色は？」と問われると、実は「白」「黄」の2種という答えが正しい。中央に咲く小さな花冠が本来のスターチスの花。一般的に花と思われているのはガクにあたる。切り花をしぼらくおいておくと花は中にしぼらない状態になるが、鮮やかなガクはそのまま残る。そのためスターチスは盆花や仏花、またドライフラワーと

して各家庭で飾られたり、アレンジメントに使われることも多い。ドライフラワーにすると年月が経っても色褪せないことが、スターチスの「変わらぬ心」「永遠に変わらない愛」という言葉の由縁である。



御坊市の「名田フラワーロード線」沿いに建ち並ぶ花き栽培のハウス



水源確保と連作障害が 花産地誕生のきっかけに

スターチス栽培の中心となる御坊市の名田地区は年間平均気温が16.8℃、年間降水量が1700ミリと温暖で霜や積雪もほとんどなく、冬場の日射量が豊富な地域だ。しかし農業に適した土地でありながらも、川などの水源が少ないことからサツマイモや麦といった天候に任せた作物を栽培してきた。昭和20年頃からはエンドウ類やスイカの露地栽培が主流になり、日高川の灌漑施設が完成した昭和40年代前半に最盛期となった。その後、エンドウの連作障害や収穫の労働力集中を回避するため、当時需要が伸びており、野菜栽培技術に応用できる花き栽培に取り組みようになった。

当初はカスミソウから始まり、昭和60年代にはスイートピーとスターチスを導入。他にもガーベラやカーネーション、バラなど徐々に多品目を栽培するようになり、花きの産地として確立していくこととなる。御坊市と日高郡6町、田辺市龍神村を管内とするJA紀州には花き部会も発足。名田地区を中心とした花き農家が名を連ね、現在はそのうち約7割がスターチスを栽培している。

スターチスは8月中旬から9月にかけて苗を定植すると、収穫するまで病害との戦いが始まる。早く植えると地温が高いため病気になるやすいが、遅らせると収穫が遅れるため見極めが難しい。地温を下げるため白黒

マルチを敷いたり、土づくりの段階で土壌を消毒したり、ミスト散水してハウス内の温度を抑えるなど、さまざまな対策で病害を防いでいる。さらに優良株の組織培養で得られるメリクロン苗を用いた栽培に切り替え、供給量も品質も安定するようになった。

平成20(2008)年にはJAが冷却設備や真空処理設備、開放的な出荷場を備えた、花きと野菜の集出荷施設「がいなポート」を整備し、花き栽培の拠点が誕生。品質保持のための検査や各段階に合わせた指導もここで行なわれている。



JA紀州の花き・野菜集出荷施設「がいなポート」。低温庫やスターチス専用の冷蔵庫も備わっている。



品質・生産量ともに定評のある紀州産スターチス。北は北海道、西は岡山まで幅広く流通。

若手農家も普及に尽力 全国に広まる 「母の日参り」の立役者



家族で花農家を営む前田さん。花の病気にはとにかく気を遣い、日々状態を見回っている。



御坊市で花きの栽培が活発になった背景には気候条件だけでなくいくつかの理由がある。その一つが施設園芸産地で農業に取り組む専業農家が多かったこと、そしてその後継者が多いことだ。現在JA紀州の中央花

き・花木部会でスターチス部会長を務める前田昌紀さんもそんな若手後継者の1人。幼い頃からハウス内を走り回っていたほど身近に花を感じながら育ち、自然と農家を継ぐ意識が培われたという。現在は同様に地域で育った若手農家とともに、情報を交換しながら品質向上や販売促進に努めている。

青年部会員は「フラワーボーイズ」として、栽培だけでなく花のプロモーション活動にも力を注いでいる。日本でも定着している母の日(5月第2日曜)の起源はアメリカの南北戦争中に敵

味方なく負傷兵の衛生環境改善に尽力した女性を偲び、その娘が母の死後、花を贈ったことにあるという。この逸話から「母の日参り」を企画し、プロジェクトチームを結成。原点に帰って母の日や彼岸、長期休暇などに墓に参り、故人を偲び花を供える

ことで家族愛や人と人との絆の大切さを考えるきっかけとなればと考え、「母の日参り」運動をスタートさせた。今では他産地や量販店にも広まり全国的な運動として拡大している。こうした活動を通じて、花を手にした人の声を聞いたことも大きな収穫だったという。「普段は出荷した後はお客さんからのお年寄りの方で小さい子からお年寄りの方まで喜んでもらえるのが感動でした」と前田さん。たくさん笑顔を生む花を作り続けるという志が青年部全体のモチベーションとなっている。



作付(収穫)面積と出荷量

	作付面積 (a)	出荷量 (千本)
全 国	18,700	124,900
和歌山	7,280	62,400
北海道	6,350	39,100
長 野	900	7,880
千 葉	588	3,540
熊 本	502	1,650

平成29年度産都道府県別の作付(収穫)面積および出荷量 ※全国値については主産県の結果を基に推計

和歌山県オリジナル品種 『紀州ファイインシリーズ』

スターチスは多年草だが、切り花栽培では一年草として扱われるため、毎年種苗を購入する必要がある。和歌山県農業試験場暖地園芸センターでは病気への強さや収量、コストなどの



和歌山県農業試験場暖地園芸センター

様々な栽培課題に対応したオリジナル品種の育成に取り組んでいる。

『紀州ファイインシリーズ』と名付けられた県オリジナル品種。これまで紀州ファイインイエローに紀州ファイインパール、紀州ファイインバイオレットなど10種を発表し、令和元(2019)年、低夜温管理栽培でも収量を多く



良い系統を選び、組織培養で増殖させる。

確保できる青色品種として紀州ファイインラベンダーを種子親とする「紀州ファイインライラック」、紀州ファイインバイオレットを種子親とする「紀州ファイインオーシャン」の2種も新たに加わった。

こうした育種は蜜蜂による交配で行なわれる。かつては手作業で受粉されていたが、効率が悪く数粒しか種が採れなかったそう。蜜蜂による交配手法を採り入れるようになり、効率は格段にアップ。同じ花同士からでもさまざまな色あいが生まれるため、そこから目指す色あいや花房の形の良いものを選抜し、切り花本数やボリュームなども考慮しながら新

たな品種を作り上げていく。基本的に親の花色(ガク色)を受け継ぐケースが多いが、時に思わぬ色が出てくることもあるのだとか。育種用のハウスの中にはまだ見ぬ色とりどりの花が出番を待っている。



紀州ファイインイエロー



紀州ファイングレープ



紀州ファイインピンク



紀州ファイインパール



紀州ファイインライラック



紀州ファイインオーシャン

生花でもドライでも楽しめる 褪せない色彩が魅力

立てるサブとしての役割が強いが、ドライにすると薬品を使わずとも鮮やかなガク色がそのまま残るため、他のドライフラワーと並べても圧倒的な華やかさと存在感を放つ。

作り方はシンプルに束ねて吊るしておくだけ。ピンと張った茎は他の花と比べても乾かす過程でおおれることなく自然に水分が抜ける。いくつかの色を合わせればより華やかになり、自然乾燥させた他の植物と取り混ぜた場合も独特の風合いが生まれておもしろい。

またドライにしたスターチスはアレンジもしやすくリースや



スターチスの本領はドライにした時に発揮されると言っても過言ではない。そのボリュームから生花ではメインの花を引き

スワッグの他、ハーバリウムや、アクセサリーパーツなどナチュラルなハンドメイドクラフトの素材としても人気が高い。生花より扱いやすいため、指先を使う訓練の一環として認知症予防にと地元の老人介護施設で用いられたりも。穂先をガラス瓶に入れて飾るだけでも愛らしく、空間を華やかにしてくれる。



季節で楽しむ いろいろな使い方

普通に飾るだけでも年中楽しめるけれど、季節の楽しみ方もいろいろある。クリスマスリースや正月飾りとしてアレンジすれば年末年始がグッと華やかに。またガクが五角形なことから「ガクがゴカク=学が合格」と、受験花として部屋に飾るのもおすすり。



ドライにしても華やかさは変わらない。生花のように花瓶に生けるだけでなくさまざまなアレンジもできる。